

夕刊文化

目利きが選ぶ 3冊

サイエンス作家 竹内 薫

評論家 速水 健朗

文芸評論家 北上 次郎

科学でツッコむ日本の歴史

平林 純著

(集英社・1000円)



嘘を暴くメス 目から鱗

科学と日本史って何の関係があるの? 素朴な疑問だが、本書を読み始めると、ナルホドと納得してしまふ。豊臣秀吉は、2万の軍勢を率いて、毛利攻めからわずか1週間で京都に戻り、明智光秀を討った。全軍が走り続けたともいわれるが、科学的に移動速度を計算してみると意外な事実が判

明する。腹心の石田三成が用意した200万個ものおにぎりが、秀吉の行軍を可能にしたという計算も面白い。那須与一は源平合戦で舟の上の扇を射貫いたとされるが、そんなこと、人間に可能なのか。その他もろもろ、まさに目から鱗、抱腹絶倒。いま、科学のメスが歴史の嘘を暴く! 歴史好きと科学好きにオススメ。★★★★★

駄目な世代

酒井 順子著

(KADOKAWA・1400円)



時代に翻弄されたバブルの子

未婚、子なしの30代という存在を指摘した『負け犬の遠吠え』の著者酒井順子が、自らも含むバブル世代について論じる。浮かれた時代の当事者と揶揄される一方、転機の時代に翻弄された。男女雇用均法第1世代。女性の社会進出が進み、新しい生き方の女性が増えた。それがW浅野らトレンドイデオロガマの一

背景となっていた。バブル後にはITやメディアも変化。特に仕事でパソコンを使えるかどうかが突きつけられた世代でもある。著者は自分世代を「駄目な世代」と捉える。例えば、先輩後輩のノリを体現するのがとんねるず。昨今の番組終了は、あの時代から変わらなかつたことこのツケを支払っているかのようにも見えるだろう。★★★★★

新宿の猫

ドリアン 助

(ポプラ社・1500円)



焼きピーマンが食べたくなる小説だ。最初の一口はお尻のほうから食べてください、と夢ちゃんはずつ。ピーマンの丸焼きを齧ると、中で蒸された果汁が弾ける。熱さの中に仄かな甘さがあり、大量にかけられている花かつおのうまみと相まって甘さはどんと口の中に広がっていく。

酒屋「一花梨花」を舞台にした猫と少女の物語である。本来ならここに登場するたくさんの猫を紹介すべきなのだが、そのピーマンの甘さが残り続ける。猫これは若さと追憶の書だ。猫とピーマンをこよなく愛した者たちの書だ。みんながもがいていたころの、遠い昔の感情が鮮やかに蘇ってくる。★★★★★

生物・生命科学大図鑑

マイケル・J・パディラほか監修

バクテリア、動植物、細胞、遺伝、医学……。中高生向けのあらゆる「生物学」が1冊になった、アメリカ発の生き活きとした教科書。柴井博四郎総監訳。(西村書店・8800円)★★★★★

呪われ女子に、なっていませんか?

山田 ノジル著

健康、美容ビジネスの周囲に多発する疑似科学。妊娠、出産周辺に出没するオカルトビジネス。子宮系、デトックスなどスピリチュアル界隈の今を総覧する。(KKベストセラーズ・1400円)★★★★★

博奕のアンソロジー

沖方丁ほか

博奕をモチーフにした短編を集めた色のアンソロジー。沈み行く船上でレーレットから、西郷隆盛VS勝海舟のチロリンまで、鮮やかな光景がひろがっていく。(光文社・1600円)★★★★★

だれの手がた・足がた?

小宮 輝之監修

ホンモノの手がた、足がたから、動物の生態に迫れるように工夫された絵本。親子で楽しく推理しながら、動物と仲良しになれる。意外と難しく、私もハマりました。(偕成社・2400円)★★★★★

ドライブイン探訪

橋本 倫史著

日本中で道路が拡張された時代に生まれたドライブイン。大いに繁盛したが、時代という荒波に飲まれていく。そんな各所のドライブイン取材したルポ。(筑摩書房・1700円)★★★★★

残りものには、過去がある

中江 有里

結婚披露宴をめぐるさまざまな人間さまざまなドラマを、丁寧に描いて語らせる。レンタル友達として披露宴に出る女性を描く冒頭の1編がいいが、地もうまい。(新潮社・1500円)★★★★★